

## 大学教育の現場からみた福祉業界・就活学生の意識のあり方

文京学院大学 田嶋英行

### I. 過去 13 年間の学生像の変化

2007 年 4 月からおよそ 13 年間、福祉系大学の専任教員として、その時代時代の若者（学生）と接してきた。2008 年のリーマンショックから数年間は、第二の就職氷河期ともいえる状況で、ほとんどの学生がいわゆる「福祉の現場」に就職していった。実際にその頃施設等に就職していった卒業生は、現在ですでに 30 歳半ばで、施設長候補になりつつある者もいる。一方で現在の空前の「売り手市場」のなかでは、もっとも優秀な学生は公務員や一般企業に、その他が現場に職を得る、という状況がある。

### II. 学生の根本的な意識のありよう

学生は一見やる気がないように見える場合があるが、「1 対 1」でじっくりと関わってみると、自分たちの人生について、かなり真剣にかつ深刻に考えている、ということが分かる。そのニーズに充分に応えられていない教職員、という現状があるように思う（とくにベテラン教員の多くに、熱意がみられない）。学生たちはみな、変化の非常に速いこれからの社会において、どのように生計を立てていけばよいか、思案しつつある。そしてどのような変化が起きても、仕事がなくならないような知識やスキルを身につけたい、と考えている。結果として、より汎用性のある知識やスキル（たとえば営業スキル）を身につけられる一般企業に入りたいと思うようになるし、保護者もそのようにしたほうがよい、とアドバイスする傾向にあるように思う。

### III. 国家資格制度にもとづいた教育内容の限界

これまで社会福祉業界は、社会福祉士や介護福祉士、精神保健福祉士といった国家レベルの資格によって発展してきた。一方で大学が国家試験合格を追求する場になってしまい、「予備校」と化してしまっているという現状がある。講義が教科書（テキスト）をわかりやすく伝えるだけだったり、演習や実習も、内容の形骸化が起きていたりすることも、否定し得ないように思う。

### IV. 「福祉経営学」が求められている

社会福祉実践の領域や学会は、これまで「経営」や「マネジメント」に必ずしも十分に焦点を当ててこなかったのではないかと。たとえば「ソーシャルワーク」という概念には、いまでも対人援助のイメージが色濃く残っているように思う。でも実際には、福祉施設や機関にも経営が必要であるし、学生たちもそのようなことを積極的に学びたいと考えている。たとえば（1）サービスの開発（起業）、（2）組織の運営・開発、（3）福祉サービスの AI・IoT 化などについては、強い関心を持っている。これらはいずれも、これからの福祉施設（機関）の経営に、大きな影響を与えるものだと思う。より多くの学生の関心を集めるには、こういったことを実際に現場で学ぶことができ、さらにそのなかで自分の知識やスキルを高めていける、ということを実践していく必要があるのではないかと。